

自己血糖測定（SMBG）と持続皮下グルコース検査（CGM）の指導で遭遇したケース

◎山崎 義則¹⁾、鶴見 侑香¹⁾、上野 雅喜¹⁾、堀江 真友¹⁾、押坂 和樹¹⁾、吉田 桃夏¹⁾、榎田 知里¹⁾、
葛西 俊二¹⁾
芳賀赤十字病院¹⁾

【はじめに】

当院では、臨床検査技師が2006年より約3,000台の自己血糖測定器の管理と指導を実施している。持続皮下グルコース測定器も同様に、2021年12月から開始し、2023年12月時点で26台となった。これまで、自己血糖測定（以下SMBG）と持続皮下グルコース検査（以下CGM）の指導してきた中で遭遇したケースを紹介する。

【指導内容の比較】

自己血糖測定器はグルテストアイ（三和化学研究所）、持続皮下グルコース測定器はFreeStyle リブレ（Abbott）を採用している。大きな相違点としてSMBGは、穿刺して血液中のグルコース濃度を測定する。それに対して、CGMは装着されたセンサーで間質液中のグルコース濃度を測定する点である。

SMBGでは、機器の操作法と測定意義が主な指導内容であった。CGMは、センサーを直接腕に装着しているため、SMBGの指導に加えてその他の指導が必要となる。

FreeStyle リブレはReaderもしくはFreeStyle リブレ Link（スマートフォンアプリ）を使用しリブレ View（管理ソフト）と連携するため、最初に初期設定の補助をすることが必須となる。リブレ Viewにより様々なレポートが表示できるため、生活習慣による血糖値の変動も指導できるようになった。

【遭遇したケース】

SMBGでは、血糖測定器や穿刺器具の使用法における指導が主であり様々な対策を講じてきた。穿刺器具の穿刺ボタンや、穿刺針廃棄時のつまみをわかりやすく目印を添付した事例。センサーへの血液吸引をスムーズにするため、血液吸引時にセンサーの先端を直角に軽く血液に触れるように指導した事例。自己管理ノート（患者様自身での測定値記載）の虚偽記載や未測定があった事例。冬季に高値を示す傾向であったり、測定できない事例などが挙げられる。

CGMでは水泳の授業やサウナに通う際の、センサーの装着・取り外しのタイミングを提案し、皮膚トラブルにおいても対応した。スキャンするタイミングを逃すケースが多発する場合はアラーム機能の設定をした。また、導入当初は劇的に改善傾向を示したにも関わらず持続できないケースがある場合は、「継続的に血糖値を管理している」という認識が持続するように、血糖トレンドを提示して指導した。

【結語】

SMBGは自ら穿刺し、血糖値を測定する。CGMはスキャンすることで容易に測定できる。いずれにしても、日々の自己管理を反映する一つの手法である。また、現在のCGMのスキルを活用し医師や医療従事者が、様々な観点からの療養指導が可能となっている。今後、更なる良好な血糖コントロールの維持につながるため、タスクシフトで加わった業務を臨床検査技師が遂行することは重要であると考えられる。

連絡先 0285-82-2195 （内線 9398）